

# ウチナーンチュと天皇・国家主義

上 地 源 光

囲碁で「捨て石」とは、相手に取られる（犠牲にして）ことを承知で、他所により大きな地所を確保するために打つ石のことだ。

沖縄も太平洋戦争で「捨て石」にされた。犠牲にされたのは碁石ではなく、二〇万を越す尊い人命であった。

裕仁天皇が敗色が濃くなってもお戦争継続に固執したことはよく知られている。一九四五年二月一四日、近衛文麿が、敗戦は必至であるが降伏は「国体」の交革を意味しない、それよりも「共産革命」で「国体」が護持できないことの方が恐ろしい、と裕仁に降伏を進言したが、「モウ一度戦果ヲ挙ゲテカラデナイト中々話ハ難シイト思フ」と、戦争を継続した。

三月一〇日の東京大空襲、四月一日からの沖縄戦、八月六日広島原爆投下と国民の犠牲が続いたにもかかわらず、裕仁は戦争を止めなかった。八月九日未明、ソ連が日本に宣戦し、満州に侵入したことを受け、やっと降伏の「聖断」をする気になったと言われている。長崎に二個目の原爆が投下された日であった。

裕仁は降伏の「聖断」を先送りし、「国体護持」のために数十万の生命を捨て石にしたのだ。

一九七九年四月、アメリカの公文書館で歴史的な文書が発見された。裕仁が沖縄の米軍占領の継続を希望したことが記録されていたのだ。

「米国が沖縄その他の琉球諸島の軍事占領を続けるよう日本の天皇が希望し……。……長期租借による、

これら諸島の米国軍事占領の継続をめざしています」。

一九四七年九月二二日、合衆国対日顧問代表部顧問 W・J・シーボルトから合衆国国務長官宛のこの文書で明らかにされた事実は、沖縄県民に衝撃を与えた。

「日本国民はそれによって米国に下心がないことを納得し、軍事目的のための米国による占領を歓迎するだろう」とまで言ったのだ。

裕仁は、「捨て石」の次に、今度は沖縄を「人柱」にし、アメリカに軍事占領の継続を「希望」したのだ。

一八七九年（明治一二年）の琉球処分で琉球王国は日本に統合されたのだが、辺境の地沖縄では、天皇のことなどほとんど知られておらず、ましてや忠誠心など微塵もなかった。その後の皇民化教育もあまり成果を上げることがなかった。

「沖縄県には固有の歴史があるが、忠君愛國の精神は他府県にははるかに及ばない。儒教の影響で孝行を重んじ祖先を崇拜しているが、国家の観念は非常に乏しい」と、本土の教育学者が嘆いたと言われている。

河上肇が一九一一年（明治四四年）那覇で講演し、「沖縄人は歴史と人情を異にしているため、他府県人

に比べて愛國心が幾分うすい感じがする。しかし、国家主義を謳歌する今日の日本において、沖縄のような地域にこのような国民がいるというのは、むしろ喜ばしいことである」と評価した。たちまち沖縄県内外で、河上のこの発言に激しい非難の声が浴びせられた。特に沖縄の文化人の中には、自分たちは、他府県人に負けぬ愛國心を持っているのに迷惑千万な話だという人が多かった。だが、当時の「沖縄毎日新聞」には「忠君愛國家になるよりも、むしろ国家思想に乏しいといわれるのを喜ぶ。……忠良なる日本人と呼ばれるより、むしろ亡國の民といわれることを願っている」と、河上を弁護する論評が載った。

しかし、一五年戦争に突入し、太平洋戦争に突き進む中で、沖縄における皇民化教育も妥協を許さない徹底的なものになった。「国家思想が薄い」といわれたことを恥じ、「亡國の民」と呼ばれるのは屈辱と、それまでの遅れを一举に取り戻そうと躍起になった。

沖縄戦直前には、ウチナンチュ（沖縄人）は、今度こそ戦果を挙げて、ヤマトンチュ（大和の人＝日本人）にウチナンチュの忠君愛國ぶりを示す絶好の機会だと一丸となって熱狂するまでになっていた。

背景には、本土における沖縄人差別、軍隊の中での差別等々、複雑な感情があったことも否定できない。

一九四五年四月一日、鉄の暴風といわれる激しい艦砲射撃で沖縄戦が始まった。米軍は、日本軍の抵抗を受けることなくその日の内に、中部西海岸に上陸、沖縄本島を南北に分断して、日本軍本隊のいる南部へ進攻した。

天皇陛下のため、本土決戦を沖縄でくい止めるのだと意気込むウチナーンチュは、ヤマトンチュを見返してやる可悲な決意で戦った。海軍部隊の司令官太田実は、沖縄県民の奮戦ぶりを高く評価し、「沖縄県民カク戦ヘリ。県民ニ対シ後世特別ノゴ高配ヲ賜ランコトヲ」と自決の前に参謀本部に打電した。

しかし、現実の戦場では、日本軍にはウチナーンチュに差別的感情や猜疑心を持つものも多く、住民に集団自決をさせたり、スパイだと言って首をはねたり、母親に乳飲み子の首を絞めさせるなど残酷な行爲を繰り返した。

アメリカ軍と戦いながら、友軍であるはずの日本兵からも身を守らなければならなかった。

裕仁が「国体護持」にこだわらず、さっさと「聖断」

をしていれば起きなかった悲劇だ。

戦争が終わって、一時はアメリカ民主主義の恩恵にあずかるかと思っていた県民も、中国革命の後、アメリカが防共の要石（沖縄のことを *Keystone of Pacific* とアメリカは呼んでいる）として強力巨大な基地建設に着手し、沖縄県民の土地・財産を武力で強奪するのを目の当たりにして、一変した。

世界の憲兵アメリカの沖縄支配は、沖縄の悲劇の新たな始まりであった。司法、立法、行政のすべての最終的権限を、アメリカの高等弁務官が掌握し、県民には限られた自治しか認められなかった。

信号無視の米兵が児童をひき殺しても、イノシシと間違えた農婦を撃ち殺しても、婦女子の暴行や殺人事件を起こしても、県民には裁判をする権限もなく、犯人たちは、笑いながらステーツ（アメリカ）へ帰っていった。

嘉手納飛行場の東側の宮森小学校にジェット戦闘機が墜落し、一七名の死者一一一名の負傷者がでるなど、基地関連の事故も頻発。県民の生命や財産が常に危険にさらされる生活が続いた。沖縄の苦難と悲劇は終わ

らなかった。

そしてそれが、裕仁の希望だったのだ。

沖縄県民は、アメリカの圧制から自由になるには、祖国ヤマトに再び帰るしかないと考えようになった。「ヤマトンチュも信用はできないが、血のつながっていないアメリカよりはいいのではないか」、と思うようになった。かつて皇民化教育を推進した教職員が中心になって祖国復帰運動が始まった。沖縄の教師たちは、再び「標準語励行」を始め、「君が代」を歌わせ、「日の丸」の小旗を作らせ、一日も早く祖国日本に帰ろうと子どもたちを教育した。天皇中心の戦前に回帰することと祖国復帰が重なって、一種の反動現象が生まれた。もちろん、裕仁の戦争責任など問題にもならなかった。

やがて、祖国復帰運動が、本土の沖縄返還運動と連携を強める中で、祖国日本の政治、経済や国民の状況が深刻な矛盾の中にあることが明らかになった。特に、サンフランシスコ体制、日米安保体制の中で、祖国そのものが、アメリカに従属し、国民の生活や平和が危険にさらされていることが次第に県民に知られるよう

になった。

六〇年代に入り、アメリカのベトナム侵略に反対する本土や世界中の運動は、祖国復帰運動に決定的な影響を与えた。沖縄の基地から毎日ベトナムに出撃し、ベトナム人民を殺戮している米兵の姿は、沖縄戦のと同じだった。県民を苦しめているアメリカは、ベトナムを侵略し、ベトナム人民に塗炭の苦しみを与えている。祖国日本の政府は、そのアメリカに追従し、アメリカのベトナム侵略を強力に支援している。帰るべき祖国への幻想が打ち砕かれたのだった。帰るべき祖国は、平和で民主的な独立した国のはずであった。

やがて、復帰運動は本土の平和運動、労働運動の強い影響を受け、「日の丸」を掲げた運動から赤旗を掲げる運動へと発展していった。

国民運動となった祖国復帰運動に抗しきれなくなった日米両国政府は、欺瞞的な「核抜き本土なみ」返還で収束をはかった。

一九七二年五月一五日、国民の鬱々たる批判の中「日米沖縄協定」が発効し、沖縄は日本に復帰した。それは、政治、経済そして文化面での急速な沖縄の本土化であり、軍事面での本土の沖縄化であった。

祖国復帰運動の発展過程で、沖縄は皇民化教育の負の遺産を払拭し、ウチナーンチュとしてのプライドを取り戻したといわれている。だが、ウチナーンチュとしてのアイデンティティが、押し寄せる本土化の波で再び押し流されそうになった。

ところが、歴史の皮肉というか、一九八七年の沖縄団体に際して、当時の西銘県知事が「天皇陛下下のご臨席の栄を賜り、沖縄の戦後を終わらせていただきたい」と要請したために急転換が起こった。裕仁の来県問題には、たちまち県民の間に戦争の悪夢を呼び覚まし、猛反発を受けた。裕仁の戦争責任を追及する世論が広がり、西銘県知事は藪をつついて蛇を出したと皮肉られる有様であった。政府も、裕仁に万一のことがあることは、皇太子の明仁を「名代」として出席させるしかなかった。

裕仁の沖縄入りを県民は許さなかったのだ。

最近、事情があつて何度か沖縄を往復した。沖縄サミットを控え、公共工事で島中が掘り返されている。あらためて沖縄経済の三Kを思い知らされた。三Kとは、基地経済、公共事業、観光産業の三つのことだ。

太田革新知事の下、基地経済からの脱皮をめざし、広大な基地を取り戻し、工業基盤整備を進め、地場産業を育成しようとしたが、選挙では支持されなかった。地理的な位置を活用し、国際的な経済や文化の交流基地としての沖縄の夢も消えてしまいそうに見える。

しかし、沖縄の友人たちと話しているとそんな心配は杞憂に過ぎないようだ。失業率が全国のお二倍以上、所得は七割しかない沖縄。こんな、日本の端っここの辺境の地であっても、若者が大勢いる。本土に行った若者も、やっぱり沖縄が一番と帰ってくるそうだ。選挙の勝ち負けは世の常。次は、革新が勝つだろうと笑い飛ばしている。

琉球の諺に「飯を食わしてくれるのが主人だ」というのがある。これは、「飯を食わすことができないのは主人ではない」とも意味している。県民の生活を守らなければ、革新であろうと保守であろうと知事は認めないということになる。今県民は、稲嶺知事が生活を守ってくれると思っている。しかし、そうではないとわかったらさっさと知事を変えらるだろう。友人たちはそう言っている。本土で三〇年以上も暮らしていると、何か大きなギャップを感じる。

沖縄人はやっぱり日本人ではないのではないか、ウチナンチュとヤマトンチュは違うようなそんな気がしてならない。

夕方になればどこかでサンシン（三味線）の音が聞こえ、それにつられて近所の人が集まり、泡盛を飲み、民謡を歌い、指笛をとばし、踊り出す。旧盆の二月も三月も前から、夕食が終わると、青年たちは部落はずれの広場に集まり、エイサー（盆踊り）の練習に熱中する。本土では考えられない。

皇民化教育、国家主義教育が席卷していた頃の、沖縄の代表的な学者の一人伊波普猷の次の言葉は印象的だ。

「天は沖縄人ならざる他の人によりては決して自己を発現せざるところを沖縄人によりて発現するのである。すなわち沖縄人なかりせば到底発現することのできないところを沖縄によりて発現するのである。……

国家主義の人はよく統一々々というが、そのいわゆる統一なるものはある一部の人々が持っている特質のみを保存して、それと異なったものは、片っ端からなくしてしまふのであまり感心できぬ。……我々沖縄の青年は臆することなく、各方面に向かってその天性の個性を発揮すべきである」。

国家主義を批判し、沖縄人は「統一」で個性を失うことなく、独自性を発揮せよと説いたのだ。ウチナンチュとしては誇りに思う頼もしい先輩だ。

今の沖縄の青年たちは、この教えのように「天性の個性を発揮」しているように見える。

あの裕仁によって、郷土沖縄は焦土となり、親兄弟を失い、ウチナンチュのプライドも大きく傷つけられた。新国家主義だの自由主義史観だのもてはやされる昨今、「愛国心の薄い」「亡国の民」としてのウチナンチュのような生き方が、今、必要な気がする。

（うえち げんこう・新潟市教員組合）

